データを活かして農業推進！“WAGRI”を活用しよう！

第３回

データ駆動型農業の普及・推進
～スマートサポートチームと人材育成～

農研機構　WAGRI 推進室 営業・マーケティング統括責任者　二宮（にのみや） 芳継（よしつぐ）

１．スマートサポートチームによるデータ駆動型農業の普及・推進

農研機構で運営している農業データ連携基盤 WAGRI は農業者が直接利用できるデータ・サービスではないので、WAGRI のデータを農業者に利用してもらうためにはどうしても ICT ベンダーや農機・資材メーカー、JA の電算計算センターなどにシステムの開発をしてもらう必要があります。

しかし、システムの開発をしている ICT ベンダーには農業者や自治体などとのつながりが弱い企業も多くあります。それでは WAGRI のデータを利用してつくった農業データクラウドサービスも農業者に利用してもらうことは困難になります。そうなるとデータ駆動型農業はなかなか普及できません。

そこで、農林水産省は、食料・農業・農村基本計画に基づく「スマート農業プロジェクト」の検討の成果として、スマート農業の現場実装を加速化するための施策を「スマート農業推進総合パッケージ」として取りまとめました（令和２年10月策定、令和４年６月改訂）。

2025年までに農業の担い手のほぼすべてがデータを活用した農業を実

践するため、

（ア）実証で培われた技術・ノウハウを有する生産者、民間事業者等からなる**スマートサポートチーム**による、新技術を積極的に取り入れる産地の支援

（イ）農業支援サービスの活用による、スマート農業に関心があるが、自力では取り組むことが困難な生産者・産地の支援

（ウ）普及指導員による、データに基づく生産者・産地指導への支援

を総合的に行うことにより、現地でのデータ活用とスマート農業人材をさらに創出する方針を打ち出しました。

下記のスライドをご参照ください。

（参考）スマート農業人材の育成とデータ活用の促進

（ア）スマートサポートチームによる新技術を積極的に取り入れる産地の支援ついて

研究者（農研機構・大学等）、民間企業（農機メーカー・ICT ベンダー・サービス事業体・物流事業体等）、スマ農アドバイザー（実証参画生産者等）、農業経営アドバイザー（政策公庫の資格取得者）、普及指導員、営農指導員（JA）などがスマートサポートチームを形成して、新技術を積極的に取り入れる産地を支援することをうたっています。

WAGRI 推進室としましては、データ駆動型農業を普及・推進していくにはスマートサポートチームの必要性を強く感じております。特にもっとも農業者に近い営農指導員（JA）や普及指導員によるデータに基づく生産者・産地指導への支援が重要と考えています。

それには営農指導員や普及指導員のデータ駆動型農業の対応力強化が必要になります。

JA 全農では昨年より営農指導員のスマート農業研修を開始されました。

WAGRI 推進室でも、WAGRI ユーザー会員の提供しているサービスを紹介する機会を開催する必要があるので、計画を検討しております。

２．人材育成によるデータ駆動型農業の普及・推進

令和４年農業構造動態調査結果では、全国の農業経営体数は97万5,100経営体で、前年に比べ5.4％減少しています。このうち、団体経営体は４万100経営体で、前年に比べ1.5％増加しています。団体経営体のうち法人経営体数は３万2,200経営体で、前年に比べ1.9％増加しました。この結果、団体経営体に占める法人経営体の割合は80％となっています。

また、法人経営体の内訳をみると、会社法人は２万1,200経営体、農事組合法人は7,700経営体となり、前年に比べ会社法人は300経営体、農事組合法人は200経営体増加しています。その中で大規模農業法人（売上５億円以上）が1,200経営体あります。

また、農業経営体の経営耕地面積の規模をみると、10ha 以上の農業経営体が59.7％を占め、前年に比べ3.3ポイント増加しています。

このような団体経営体が増加し、経営耕地面積の規模が大きくなる状

況で、農業現場のデジタル化を進める必要性は高くなっています。

農業の現場の管理面においては、生産・出荷や経営に関わる情報は紙で処理する農業者がまだまだ多い状況です。農業のDX化はまず労務管理、圃場管理、経営管理などの「脱アナログ」から始まると思っています。

しかし、担い手不足の解消や農業の収量や収益を向上させることができなければ、団体経営体は持続できないものと思います。そのため、データ駆動型農業を推進するリーダーを創出することは急務です。大学の農学部、農業高校、農業大学校などでデータ駆動型農業のカリキュラムを学び、今まで“経験と勘”が重要視されていた農業では、一人前になるまで時間がかかりましたが、データ駆動型農業を学ぶことで、就農したり、会社に就職した際にも即戦力となり、将来リーダーになれる人材を創出していく必要があります。

農業データの中で気象データや農地データなどを研究用に利用している学生もいます。それ以外にも病虫害AI診断や病害虫小図鑑、農薬登録情報、生育予測サービスなども学生時代から学んでおけば、社会人になった際に応用の効く農業DX化に対応できます。

WAGRI推進室では、教育用にWAGRIのデータを利用する場合は割引料金を検討していますし、WAGRI会員のサービスでも教育支援をしている企業もあります。

営農指導員もこのような教育を受けてくる学生がいれば、即戦力間違いなしです。

その後の現場経験を重ねることで、農業者に有益なサービスの提供もできることを期待いたします。

プロフィール
二宮芳継　前職で新規事業に携わり、農産物を市場外流通でスーパーやコンビニ、生協などに販売。定年後、農研機構に入構して農業データ連携基盤「WAGRI」の営業を担当し、普及・推進をしています。

関連資料：https://www.zenkyou.com/archive/